



島根県 / 静間川

しずまがわ

旧式魚道を「水辺のこわざ」で改良 クラウドファンディングを活用

Profile



【河川名】
静間川水系静間川
【執筆者】
森山俊信（NPO 法人 緑と水の連絡会議 水辺担当）



中上流域でのアユの生息が激減。そこで、機能していなかった中流に位置する、旧タイプの魚道を、地元NPO法人が主体となり、改良工事を行いました。クラウドファンディングを活用することで、その輪が大きく広がりました。

経緯・目的

アユが遡ってこない

静間川は、国立公園「三瓶山」や世界遺産「石見銀山」の地域を水源とする延長約20kmの大田市を貫流する二級河川です。漁協はないものの、多くの生き物が生息していますが、近年、アユが激減しました。

そこで、たかはし河川生物調査研究所（代表高橋勇夫氏）の協力をあおぎ、調査を行ったところ、多数ある河川内の構造物が、アユの遡上を阻害しており、中でも中流域にある農業用取水堰（和田堰）が大きな障害となっていることが分かりました。

多くの協力者とともに

第一のターゲットを和田堰とし、既設の旧式魚道の改良をめざし、関係者と協議を行いました。

この堰は、県（河川管理者）、市（所有者）、用水組合（管理・利用）と関係者が絡み合うが、それぞれに丁寧に説明し、関係づくりを行うことで、理解を得ました。

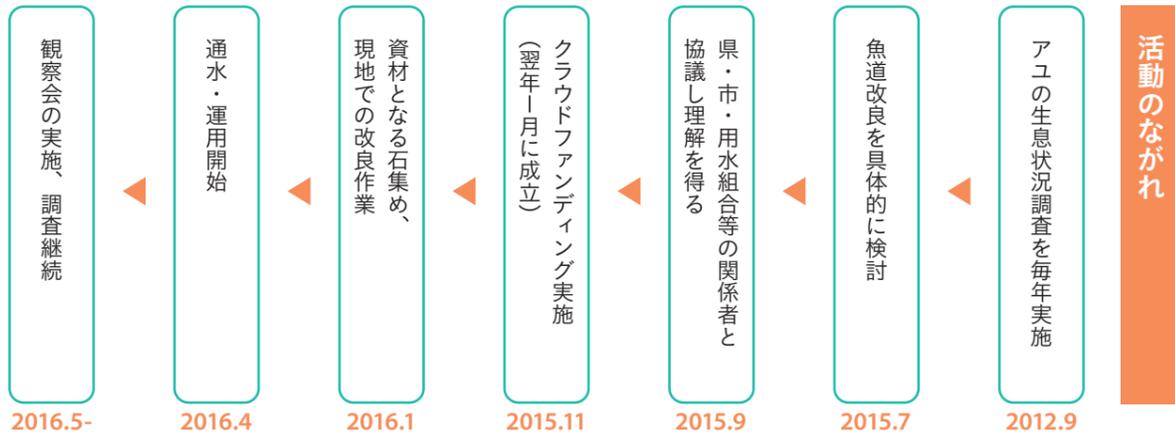
クラウドファンディングの活用

当時は珍しかったインターネットでの資金集めの手法である「クラウドファンディング」を活用し、多くの賛同を得て、目標の資金を集めることができました。



クラウドファンディング達成

活動のながれ



施工後の様子



施工中の様子



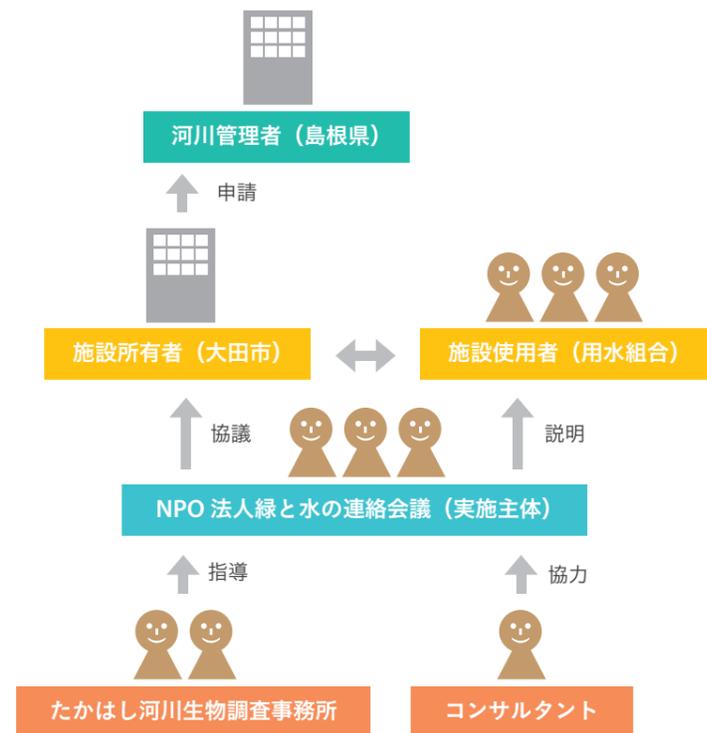
たかはし河川生物調査事務所の支援を受け、継続的に調査を実施

実施体制・スキーム

■事業主体は、NPO法人緑と水の連絡会議。造園業や建築業のメンバーが在籍。

■河川管理者（県）への手続きは、構造物所有者（市）から行ってもらうことで、円滑に進みました。

■技術面については、たかはし河川生物調査事務所の指導を受けました。また、必要な資材の数量計算等については、地元のコンサルタント（株）大隆設計が協力してくれました。



現場のキーパーソン

和田 譲二さん NPO法人 緑と水の連絡会議
 今井 祥紀さん

和田さんは、NPOの事務局長。環境系活動の現場回しも経験豊富。県への申請から、協力者集め、原材料や重機の手配まで、大活躍でした。
 今井さんは、1ターンのNPOのメンバーに。クラウドファンディングの活用も、若い彼の発案です。資金集めはもとより、取り組みの輪が広がったのは、彼の力が大きく、今回の取り組みの一番の立役者です。



地元イラストレーターによるデザインの看板設置
 わかりやすく、多くの人に趣旨を知っていただくために、イラストレーターに依頼しポップな看板を作成し、隣接する揚水ポンプ小屋の壁面に設置しました。また、クラウドファンディングの返礼として、アユをモチーフにした似顔絵アイコンや缶バッジの制作を行いました。

施工後の維持管理や
 利活用の工夫



効果（一次効果・二次効果）

- 改良後、その上流域でも少数ですがアユの生息が再び確認されるようになりました。アユをはじめとした川の生き物の、生息範囲の拡大につながったと考えられます。
- 民間団体が主体となった魚道整備の手法については、モデル的なケースとなると期待されます。
- マスメディアに取り上げて頂いたことで、多くの人、河川環境に興味を持っていただける機会となりました。
- 観察会などで小学生の学びの場になっています。

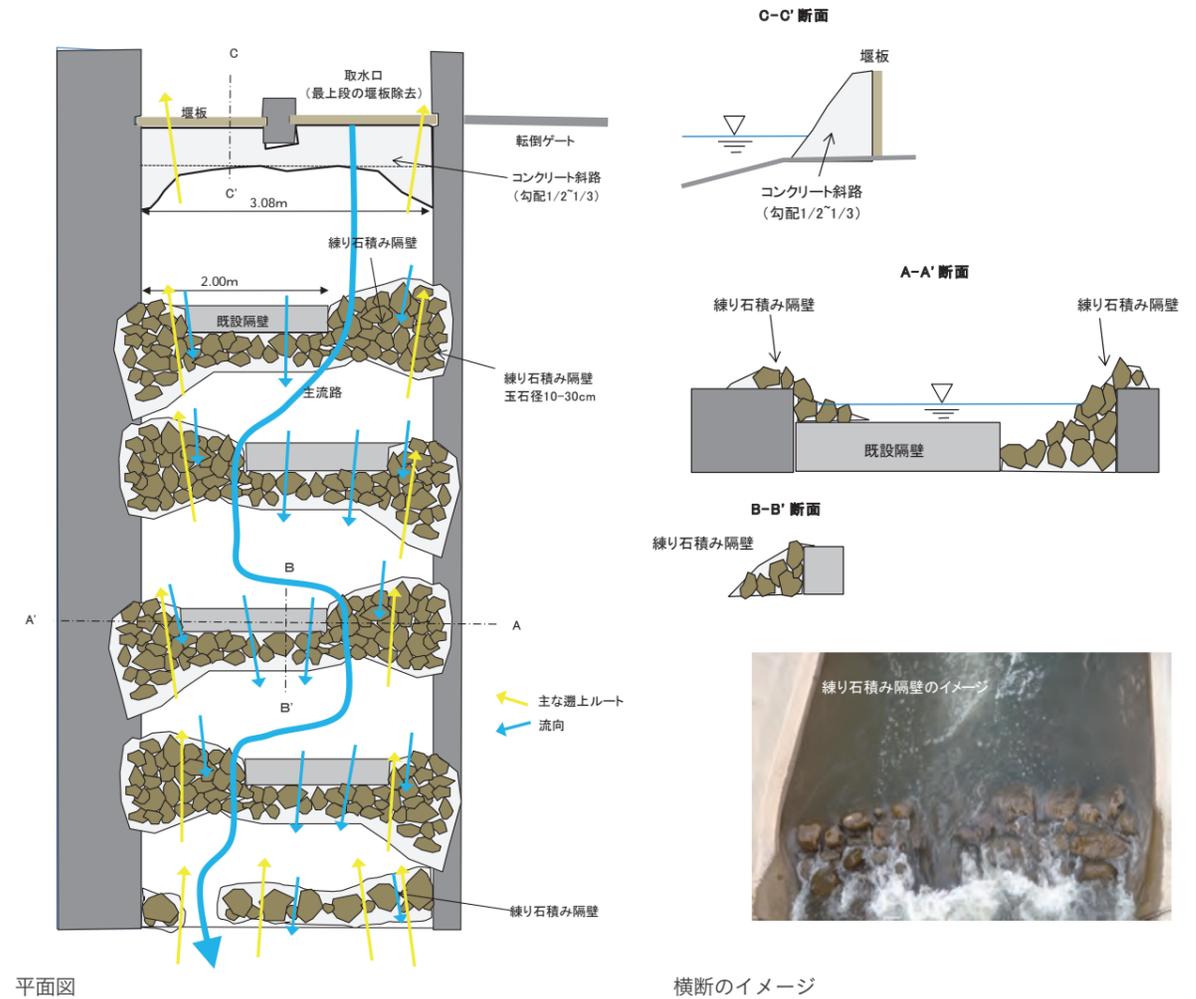


魚道の観察会を定期的に開催

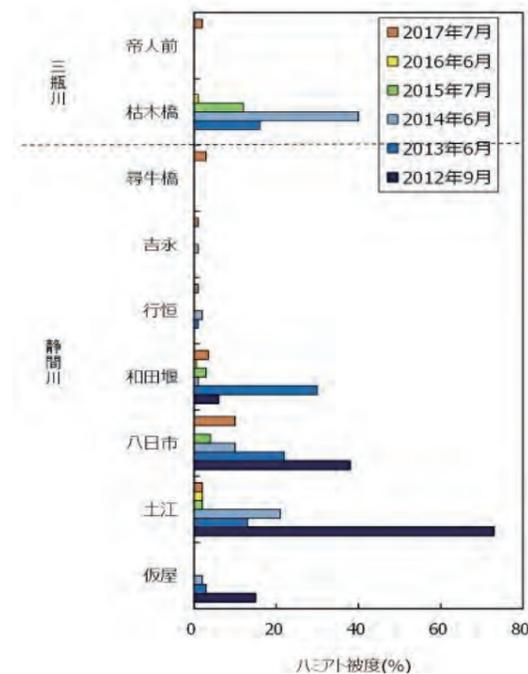
工法の説明・工夫した点

「水辺のこわざ」を準用して

既存の旧式魚道はそのままに、型枠などは用いずに、コンクリートや石をそのまま設置し、工法的に簡易に改良を行い、費用面も抑えることができました。



横断のイメージ



アユの生息状況の調査結果



作業中の様子



老若男女で力を合わせて資材となる石集め

使用材料・工具・造り方

■ 資材となる石については、老若男女、中には3世代で参加する中で、県に許可を得て上流部で集めました。
 ■ 単に資材費の節約だけでなく、多くの人が参加することで機運醸成につながりました。